

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：17601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04633

研究課題名(和文) 幼児期からの道徳性育成のためのカリキュラム編成に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Study on curriculum organization to promote moral development from early childhood

研究代表者

椋木 香子 (Mukugi, Kyoko)

宮崎大学・教育学部・教授

研究者番号：00520230

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、オーストラリア及びドイツにおける幼児教育の視察調査を行い、カリキュラムと実践の関係について、実践事例や保育者へのインタビューをもとに分析・考察を行った。その際、各国の社会的・文化的背景を考慮した上で、道徳性育成についてどう扱われているか調査した。多文化・他民族社会を背景とするオーストラリアでは、子どもたちのアイデンティティの形成や多文化理解・多様性の理解に力を入れている。ドイツでは、幼児教育においてもコンピテンシーモデルが導入されつつあるが、道徳性育成に関しては、自己形成や自己意識に関する活動が関連するのではないかと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

我が国では幼児期には「道徳性・規範意識の芽生え」を培うとされている。オーストラリアやドイツでは「道徳性」という言葉は使われていないが、オーストラリアでは「相手を思いやり、尊重する人間関係を構築する」「多様性を尊重する」ことが国の保育理念として明記されている。また、両国とも子どものポートフォリオを作成し、アイデンティティの形成を重視している。一方で、規範意識に関しては他の活動に付随して触れられている程度である。今後、グローバル化が進む中で、幼児期の道徳性育成においては、自己概念の形成と多様性の尊重が重要になってくると考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this research, we conducted inspection survey of early childhood education in Australia and Germany, and analyzed and considered the relation between curriculum and practice by analyzing practice cases and interviews with teachers. At that time, we investigated how moral education is conducted, taking into account the social and cultural background of each country.

In the context of multicultural and multiethnic societies, Australia is focusing on the formation of children's identities and the understanding of multicultural and diversity. In Germany, a competency model is being introduced in early childhood education, but we think that activities related to self-formation and self-consciousness may be related to moral development.

研究分野：道徳教育

キーワード：幼児教育・保育 道徳教育 カリキュラム

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 我が国の幼児教育・保育における道徳性の育成については、小学校以降の「道徳性の芽生え」を培う時期とされており、日常生活を通して培われるとされているが、領域としては「人間関係」の一部とされ、カリキュラムとして十分に系統立てられているとは言い難い。一方で、道徳性は、所属する社会集団の文化的・歴史的背景に大きく影響を受けている。個々の指導方法だけでなく、カリキュラム・レベルでどのような子どもを育成しようとしているのかなど、カリキュラムの国際比較をすることで、我が国の幼児教育・保育における道徳性育成の独自性も明確になると考えた。

(2) 本研究は平成24年度から平成27年度にかけて、科学研究費助成事業(若手研究(B))の助成を受けて実施した「社会道徳的雰囲気的确立を目指す幼児教育・保育プログラムの開発」(課題番号:24730692)の継続・発展的研究である。この研究の中で、我が国で行われている思いやり育成や集団づくりの実践と諸外国の保育実践事例の比較分析を行うため、イギリス、ドイツ、オーストラリアの幼児教育関連施設の視察調査を行った。その過程で、教育・保育カリキュラムの基本的な考え方や教育方法の背景にある教育思想・教育的視点が我が国と根本的に異なることが示唆された。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究では、我が国の社会的・文化的背景に即して、幼児期からの道徳性育成のためのカリキュラム編成を行うための編成原理を構築することを目的とする。そのために、これまでの調査結果を踏まえ、カリキュラムの国際比較検討を行い、各国のカリキュラム編成の基礎となっている教育学的視点を明確にする。

(2) さらに、若手研究(B)の研究成果を踏まえ、道徳性の発達に関わる子どもの模倣行為と認識の発達を促す保育者の働きかけとの関係について、実践事例分析を行い、考察する。

### 3. 研究の方法

#### (1) カリキュラムと実践事例の国際比較研究

本研究期間では、オーストラリアとドイツの幼児教育・保育のカリキュラムと実践事例の検討を行った。オーストラリアは、若手研究(B)から継続して同じ園の視察調査を行っており、平成27~30年度までの計4年間にわたる4回の調査全体を通じた考察を行った。ドイツは、平成28年度に視察を行ったテューリンゲン州のフレーベルハウス幼稚園の視察を計画していたが、バーデン=ヴュルテンベルク州での視察の機会が得られたため、こちらを優先した。

視察調査においては、訪問施設の都合に合わせてながら、3~5時間の参与観察、園長・保育者へのインタビュー(園長・保育者の都合に合わせて、保育中や保育後に実施)、写真撮影による記録を行った。

#### (2) 子どもの認識の発達に即した支援方法の実践事例分析

本研究期間では、若手研究(B)に引き続き、積み木遊びの調査を行った。調査対象は0~5歳児の横断的・縦断的調査を続けている保育園であり、春と秋の2回調査を実施した。

具体的な調査方法は以下の通りである。各クラス(年齢別)で子どもの積み木遊びの様子を20~30分間観察した。観察記録はメモのほか、4点からの定点固定のビデオ撮影と、フリーハンドによる撮影(1~2台)、写真撮影により実施した。本研究期間では、若手研究(B)の結果に基づき、子どもの模倣行為や認識の発達を促すような保育者の働きかけと子どもの反応を中心に観察調査を行った。観察した日の午後、撮影した写真やビデオを見ながら、担当保育者と園長にインタビューを行い、日頃の子どもの様子との比較や子どもの遊びで気づいたことなどを聞いた。

### 4. 研究成果

#### (1) カリキュラムと実践事例の比較研究(オーストラリア)

##### ①オーストラリアの幼児教育・保育の枠組み

2009年に当時のオーストラリア政府の教育・雇用・職場関係省(Department of Education, Employment and Workplace)から出された、幼児教育者のためのオーストラリア初の国の乳幼児期の学習のための枠組みが、「BELONGING, BEING & BECOMING The Early Years Learning Framework for Australia」(以下、EYLFと略す)である。この中で、乳幼児期の学習の枠組みは、PRINCIPLE(保育理念)、PRACTICE(実践方法)、LEARNING OUTCOMES(学習成果)の3つで構成されており、それらを包括するテーマが、BELONGING, BEING & BECOMINGである。

保育理念としては、1. 安全で、敬意をもった相互的な関係(Secure, respectful and reciprocal relationship)、2. パートナーシップ(Partnerships)、3. 高い期待と公平さ(High expectations and equity)、4. 多様性の尊重(Respect for diversity)、5. 継続的な学習と省察的实践(Ongoing learning and reflective practice)の5つが示されている。実践方法としては、「包括的アプローチ(Holistic approach)」、「子どもたちへの応答性(Responsiveness to children)」、「遊びを通じた学び(Learning through play)」、「意図的な教育(Intentional

teaching)」、「学びの環境 (Learning environments)」、「文化的能力 (Cultural competence)」、「学びの連続性と移行期(Continuity of learning and transitions)」、「学びの評価 (Assessment for learning)」の8つが示されている。学習成果としては、「子どもたちはアイデンティティの強い感覚を持つ (Outcome 1: Children have a strong sense of identity)」、「子どもたちは彼らの世界につながり、彼らの世界に貢献する (Outcome 2: Children are connected with and contribute to their world)」、「子どもたちは幸福の強い感覚を持つ (Outcome 3: Children have a strong sense of wellbeing)」、「子どもたちは自信のある熱心な学習者である (Outcome 4: Children are confident and involved learners)」、「子どもは効果的な伝達者である (Outcome 5: Children are effective communicators)」の5つが示されている。我が国の『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』等で定められている保育内容と比較すると、子どもの主体性や思考力を育成する姿勢が強く示されている。

## ② オーストラリアの幼児教育・保育カリキュラムと保育実践の検討

EYLF に基づき、各園のカリキュラムが編成され、保育実践が行われている。実際の保育では日本に馴染みのないもの、逆に日本にもあるようなものなど、様々だったが、本研究では、カリキュラムと実践の関係に着目するため、視察の結果、カリキュラム編成に重要だと考えられたカリキュラム・マネジメント、観察の重視、EYLF と保育との関連についての保育者の意識の3点について、視察した4園の中で特に一つのPreschoolでの調査を基に考察を行った。

オーストラリアでは、EYLF に基づいて各園でカリキュラムを策定しているが、日本に比べ、カリキュラム・マネジメントがしっかり機能しているという印象を受けた。カリキュラムの内容だけでなく、カリキュラムの運用の仕方も各園で随時見直し、改善を図っている。そのようなマネジメントを可能にしているのが、観察の重視である。特に視察した園では、その日に観察記録だけを行う保育者が役割分担されていた。様々な形で記録を作成し、それを子どものポートフォリオとして残すとともに、園での活動記録を写真や図なども入れて作成し、それをエビデンスとして評価を行っていた。さらにその記録や評価を基に、カリキュラムを改善し、策定することが日常的に行われていた。また、保育者1人1人がEYLF との関連を意識して、カリキュラムや保育実践の評価を行っていることも保育者へのインタビューより示された。

日本よりもカリキュラム・マネジメントが機能している理由として、評価の捉え方の違いがあると考えられる。オーストラリアでは、LEARNING OUTCOMES (学習成果) を達成するために子どもの様々な活動を評価しているが、何かができているか・理解できているか、もしくは、できていないか、を評価しているのではなく、子どもがどのようなことに関心を持ち、どのような活動を行ったか、そこから何を学んでいるか、どんな成長があるかを評価している。そして、それを手掛かりにして、次に子どもの学びを促進するために、どのような活動が必要かを随時検討している。つまり、学習成果の達成度を評価しているのではなく、学習成果を達成するために、子どもの興味・関心、人間関係を含む子どもの活動自体を評価しているのである。

道徳性育成のカリキュラム開発の観点から考察すると、オーストラリアのEYLFの保育理念、実践方法、学習成果のいずれにも「道徳性」という言葉はでてきてない。しかし、「お互いを認め合い、思いやり、尊重する」「多様性を尊重する」といったことは繰り返し出てくる。一方で、「規範意識」についてはあまり聞くことはなかった。これらのことから、幼児期における「道徳性」の枠組みの捉え直しが必要だと考えられる。また、カリキュラム開発においても、思いやりや規範意識が他の活動の要素とどう関連するかを考察する必要がある。

## (2) カリキュラムと実践事例の比較研究 (ドイツ)

### ① ドイツ・バーデン=ヴュルテンベルク州の幼児教育・保育の枠組み

ドイツはコンピテンシーを基盤とする教育に向け改革に着手している。この背景には、PISA2000 調査結果がもたらしたいわゆる「PISA ショック」、また移民の背景を持つ子どもを含めた環境の多様性 (貧困への対応を含む) への対応が迫られたことなどがある。2003 年に連邦共通の「教育スタンダード (Bildungsstandarts)」、2004 年には「幼児通所施設における幼児期の教育のための各州共通枠組み」と、大綱化がなされた。これらの提言において重要視されているのは、就学前教育内容の基準、幼児期の言語育成支援、初等教育学校との接続強化である。保育所 (Kinderkrippe) や幼稚園 (Kindergarten) を包摂した幼児通所施設 (Kindertageseinrichtungen) は幼児期の教育課題に取り組む場として再定義され、公教育システムに不可欠な部門としてとらえられるようになり、就学前教育の領域でもコンピテンシーモデルが導入されつつある。この大綱に沿いつつも、ドイツ各州のカリキュラム構成はそれぞれ独自性を持つ。

バーデン=ヴュルテンベルク州では、2011 年に文化・青年・スポーツ省において「バーデン=ヴュルテンベルク州幼稚園およびその他の幼児通所施設における教育・訓育オリエンテーション計画 (Orientierungsplan für Bildung und Erziehung für die baden-württembergischen Kindergärten und weiteren Kindertageseinrichtungen)」(以下、「オリエンテーション計画」と略す) が策定され、これに基づいて各園のカリキュラムが編成され、実践が行われている。「オリエンテーション計画」では、初等教育との接続の観点から複数の「コンピテンシー (Kompetenzen)」を十分備えることが初等教育学校入学準備につながるものとして示されており、幼児教育において18の観点から子どもが「…することができる」よう支援することが明示

されている。そこに示されたような子どもの姿を認め、支援する教育活動として設定された6つの「教育・発達の領域」が、(1)身体(Körper)、(2)感覚(Sinne)、(3)ことば(Sprache)、(4)思考(Denken)、(5)感情と思いやり(Gefühl und Mitgefühl)、(6)意味づけ、価値、宗教(Sinn, Werte und Religion)である。この6領域は子どもが主体的に活動することを通じて、「自分自身の行動を通じて世界と自分自身とについての知識を創造する」、いわば自己形成が見られる領域を指す。

## ②ドイツ・バーデン=ヴュルテンベルク州の幼児教育・保育カリキュラムと保育実践の検討

本研究におけるドイツでの視察調査は、今後のカリキュラム研究の予備調査である。今回は2つの幼稚園で、登園から降園までの保育の様子及び子どもたちの様子を視察した。一つは山あいにある小規模の幼稚園で、森への散策にも同行した。もう一つは町中の住宅地にある幼稚園であり、複数のクラスがある、比較的大きな幼稚園だった。いずれの園も、グループで話を聞いたり活動したりする時間があり、その前後は自由に遊べるようになっていた。また、ポートフォリオもイギリスやオーストラリアと同様な形で作成され、活用されていた。

道徳性の育成に関しては、生活や遊びの中でのルールの学習やお当番活動、思いやりなどの社会性の形成を通して行われていたが、自己意識や自己形成と関連した働きかけが特徴的だと考えられる。例えば、遊びやおやつを選択、当番活動など、様々な場面で子どもの意思表示や判断の確認が行われていた。また、ポートフォリオの中で5歳児の「これが私(ICH)」と題された製作物があった。手鏡の枠に自分の顔を描くのであるが、この活動は「私」という自己存在を確認し、意識する契機となる。さらに、ある園では、入り口に「死」や「老い」について考える絵本がディスプレイされていた。これは、ある園児の親が亡くなったので、それについてみんなで考え、知るために展示しているとのことだった。「悲しみをどう受け止めるか」を学ぶことが重要だと保育者は話していたが、「死」に向き合うことは必然的に「生きている自分」を自覚させることにつながる。

ドイツにおいても、移民や国際結婚の増加で、多様な文化的背景を持つ子どもたちへの教育が重要な課題の一つとなっている。自己意識や自己形成に関連する取り組みは、子どものアイデンティティの形成につながる。このことが他者意識や多様性の理解、寛容等にもつながると考えられる。「オリエンテーション計画」の詳細な内容についての検討はこれからの課題であるが、6領域として「思いやり」や「価値」が挙げられていることから、「道徳性」という言葉自体は使われていないが、就学前教育における道徳性の育成は重視されていると考えられる。

なお、バーデン=ヴュルテンベルク州では2つの幼稚園の視察に加え、幼小接続についても考察するため、2つの小学校の視察も行った。小学校では特に道徳教育は行なっておらず、学校のルールを守るといった指導を行う程度ということだったが、宗教のテキストを見てみると、道徳に当たるようなことが扱われている。道徳性や社会性、市民性に関しては中等教育学校から教えるとのことであった。ドイツでの幼稚園・学校視察はまだ数が少ないため、継続して視察調査を行いたい。また、バーデン=ヴュルテンベルク州の学校教育の「教育計画」(Bildungsplan)と「オリエンテーション計画」との関連の検討も今後の課題である。

## (4) 子どもの認識の発達に即した支援方法の実践事例分析

若手研究(B)の研究結果から、子どもの模倣行為が友達と仲良く遊ぶ際に重要であることが示唆された。また、模倣行為が子どもの認識(空間認識、概念、イメージの共有等)に影響を受けていることも示唆された。これらを踏まえ、道徳性の発達に関わる子どもの模倣行為と認識の発達を促す保育者の働きかけとの関係について、積み木遊びを通して実践事例分析を行い、考察する予定であったが、詳細な分析を行うまでに至らなかった。今回は研究協力園において、0～5歳の各クラスで、春と秋の各2回、積み木遊びの実践を行っていただき、参与観察及び保育者へのインタビュー調査を実施した。これまでの研究全体を通じた詳細な分析は今後の課題である。

## 〈主な参考文献・URL〉

- The Australian Government Department of Education, Employment and Workplace 2009: BELONGING, BEING & BECOMING The Early Years Learning Framework for Australia.
- Jugendministerkonferenz/Kultusministerkonferenz (JMK/KMK) 2004: Gemeinsamer Rahmen der Länder für die frühe Bildung in Kindertageseinrichtungen. URL: [https://www.kmk.org/fileadmin/Dateien/veroeffentlichungen\\_beschluesse/2004/2004\\_06\\_03-Fruhe-Bildung-Kindertageseinrichtungen.pdf](https://www.kmk.org/fileadmin/Dateien/veroeffentlichungen_beschluesse/2004/2004_06_03-Fruhe-Bildung-Kindertageseinrichtungen.pdf)
- Ministerium für Kultus, Jugend und Sport Baden-Württemberg 2011: Orientierungsplan für Bildung und Erziehung für die baden-württembergischen Kindergärten und weiteren Kindertageseinrichtungen. URL: [http://kindergaerten-bw.de/,Lde/Startseite/Fruhe+Bildung/Material\\_Orientierungsplan](http://kindergaerten-bw.de/,Lde/Startseite/Fruhe+Bildung/Material_Orientierungsplan)
- 渡邊眞依子 2018: ドイツの幼児教育カリキュラムにおけるコンピテンシーの位置、人間発達学 研究、9、pp.127-137

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松村納央子	4. 巻 第11号
2. 論文標題 ドイツ幼稚園教育における道徳性育成ーバーデン・ヴュルテンベルク州の幼児教育指針を手がかりにー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山口学芸大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 79、85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 椋木香子	4. 巻 第29号
2. 論文標題 『幼児教育の書簡』におけるベスタロッチーの道徳教育論	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人間教育の探究	6. 最初と最後の頁 23、43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 椋木香子
2. 発表標題 オーストラリアにおける幼児教育カリキュラムの実践事例の検討
3. 学会等名 日本ベスタロッチー・フレーベル学会第37回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松村納央子
2. 発表標題 Fr. フレーベル「媒介学校」論考にみる遊戯と教授の関連
3. 学会等名 日本ベスタロッチー・フレーベル学会第37回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

シンポジウム「ベスタロッター・フレーベル研究のグローバル化とは何かー2016年ドイツ・カッセルにおける第7回国際フレーベル学会に参加してー」報告（『人間教育の探究』日本ベスタロッター・フレーベル学会紀要、2017、所収）  
提案2：フレーベル幼稚園を参観して（椋木香子）  
提案4：ドイツにおけるフレーベル研究の現在ーハイラントの講演「フレーベル受容の歴史について」とパート・ブランケンブルクのフレーベル博物館の研究活動を中心にー（松村納央子）

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松村 納央子 (Matsumura Naoko) (50341136)	山口学芸大学・教育学部・准教授  (35507)	
研究協力者	西田 幸代 (Nishida Yukiyo)		
研究協力者	シムズ マーガレット (Sims Margaret)		
研究協力者	森野 美央 (Morino Mio)		
研究協力者	松野 仁英 (Matsuno Hitohide)		

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	黒田 ゆり  (Kuroda Yuri)		
研究協力者	紀ワイルド 恵子  (Kino Wild Keiko)		